

## 「絵草紙さやま」の舞台裏から --- 市民芸術祭・みどころ(1) ---

「絵草紙さやま」は、「見るなの座敷」という昔話・民話を基として、民話風ドラマを前後に配し、間に狭山の歳時記の趣をもつ1月から12月までの祭事・行事をはさんだ立体絵本の体裁で構成されています。

狭山の数多い祭事・行事の中から、月ごとに1件をピックアップしたものを、参加団体の理解と協力によって一年を通した歳時記として編成することができました。

ドラマ部分は、娘(実はウグイス)の言う「十三番目の座敷を見るな」がキーワードで、それに「やん太」と「ごんぞ」が語りによってからみます。そして、間の歳時記の部分は、「やん太」が狂言廻しとなって月々を順次紹介しながら展開するという趣向です。

例をいくつか簡単に紹介してみますと・・・

2月：上奥富の「梅宮神社の甘酒祭」の映写 9月：八幡神社の「入間川鹿子舞」の実演

11月：「口切」の茶事の一部が披露されます

「絵草紙さやま」は、11もの団体の参加があって成立しましたが、これは文団連ならではの舞台づくりの姿だろうと思います。しかし、より深く広い関りあいのできる方向・方策を、これからは探していくことが必要だと考えます。

出演の方々はベテランぞろいなので安心ですが、スタッフは不安いっぱいです。時間の制約や人手の問題のある中で、数多い場面転換の処理等、種々の難問を抱えて四苦八苦。でもここがふんばりどころなので、本番に向けて頑張るつもりです。

狭山放送劇団「ヴォーチェの会」 武内 哲朗

---

## いけばなの歴史(一) --- 豆知識シリーズ その9 ---

いけばなの歴史は大変古く、飛鳥時代に中国の隋に遣わされた遣隋使・小野妹子が隋から帰朝して、「隋では仏前に花を挿している」と述べたのを聖徳太子がお聞きになって、これをヒントに太子自ら陰陽の法をさだめて花を仏前に供花されたことに遡ります。

小野専務(妹子)は、聖徳太子から華道の伝授を受けて常に坊に住み、池で沐浴して「如意輪観世音菩薩」(京都六角堂)に供花するとともに、世に華道を広めました。そこで誰言うことなく「池坊」と人は呼ぶようになりました。ですから、華道といえば「池坊」であって「流」もなく「派」もなくただ「華道池坊」と言われているのです。

江戸中期を過ぎる頃には、華道は盛んな勢いで全国に発展しました。しかし幕末から明治にかけては一時火が消えたようになりましたが、新興明治の活気と共に新しい進路が開かれ、外国文化がはなばなしく流入し、明治末期には洋風が採りいれられるにつれ、華道にも洋花を使うようになってきました。

その後、しだいに華道は生活に欠かせぬものと考えられる程、身近なものとして普及し、江戸中期に「古流」、明治の中ごろには「小原流」、昭和のはじめに「草月流」、その他たくさんの流派が次々とあられ、展覧会なども数多く催され、親しまれているのです。

狭山市華道連盟 池坊 山中春光



魚道生の生花  
池坊専定作(江戸後期)  
資料：『あすへの序章  
池坊専永展』